

准又画本日載

四十七

大正五年十一月上院起筆

特別
イ4
1919
296



とせりといふり皆まじしとて言ふも或も誤評あり
無いことし今も思ふ所なりとて自ら合評
すといふも其れを又と較べて見ても
あつたところの多しといふことある
あつたところの多しといふことある
人である利権の争ひを解せん
あつたところの多しといふことある
併し直評といふことある
いふことあるといふことある
九つをいふことある
あつたところの多しといふことある
あつたところの多しといふことある

評しつゝとて或る所の評をいふも
うたふもやあつたといふことある
あつたところの多しといふことある
あつたところの多しといふことある
あつたところの多しといふことある

とて四月の評の三つ年といふことある
あつたところの多しといふことある
あつたところの多しといふことある
あつたところの多しといふことある
あつたところの多しといふことある

○年式に於て早きものはさうはゆき道は自れホートン
の久におもひまきも直つて居る河原の丘を流布して
さうはゆき道とあせし早稲田大川ののり力も
東寺の早稲田と云ふところの河原の河原海
堂と一筋早稲田校の傍りとする向背に違ひ蛇のこのまき
しゑんは河原の記念祭を催すもさう早稲田
其の傍りへまき道とあせし又蛇のちを利用せ
早稲田の河原の河原海堂のり力もさうはゆき道
さうはゆき道のり力もさうはゆき道のり力もさう
さうはゆき道のり力もさうはゆき道のり力もさう
くまをさうはゆき道のり力もさうはゆき道のり
津久二つむらうもさうはゆき道のり力もさうは

をさうはゆき道のり力もさうはゆき道のり力も
をさうはゆき道のり力もさうはゆき道のり力も
自力と今も無関係にせんことを致す河原海
堂のり力もさうはゆき道のり力もさうはゆき道
のり力もさうはゆき道のり力もさうはゆき道
ある位りさうはゆき道のり力もさうはゆき道
行ふとさうはゆき道のり力もさうはゆき道
とあせしまをさうはゆき道のり力もさうはゆき道
○新報に年首こうけえお海大東男余のお
のり力もさうはゆき道のり力もさうはゆき道
りさうはゆき道のり力もさうはゆき道
狭きこと知るんかさうはゆき道のり力もさうは

るより而も高分の位をまゝに為物をも其の以け片
ついで西掃しとつと見え聖に其の事の略を一行を
掛く

驟雨移移入其来白雲満蓋花徘徊細晴古
獨生お親しあも唯とこえらるる耳

○舊曆二十日大改に計ちて金中一或胃に四堆り
大改に着後旅宿に計ちて三日、其間長田秋清
余をゆひ来り余茶中よりわつて談す、秋清は
しるし先きに溢血脱の病を患ふも其病とて未だ
回復にむくも而して七日才つて治る、其は其心
病深漸く原毒を忘と判明し、其病とて未だ秋
清自ら此の病の危殆を説き、第一脱を侵す

ことあるは政令下傷るると云ふ余の茶中より其
り秋清の忘の病を治ることを思ふ、其病を治る
めは、秋清の病を治ることを思ふ、其病を治る
トと断けり、つたりあしく其の用を予傳へん
と云ふ一冊の病を治ることを思ふ、其病を治る
る病を治ることを思ふ、其病を治ることを思ふ、
こ希し、其病を治ることを思ふ、其病を治ることを思ふ、
國南録と云ふ余の病を治ることを思ふ、其病を治ることを思ふ、
思ひ可之れを出版せん、ことを思ふ、其病を治ることを思ふ、
と云ふ後三日余の病を治ることを思ふ、其病を治ることを思ふ、
んば、秋清の病を治ることを思ふ、其病を治ることを思ふ、
七ころ其の病を治ることを思ふ、其病を治ることを思ふ、

犯し忽ち溺死んたる也余計に歎しと悵久之矣
秋濤を極る故浪家を修めたることあり
又此の人の誤解を極く日露戦役の際
露探と目せんとすことあり 漢人の極る故の性
自ら極きたる禍りゆ余を極るも其の意
あるを信す秋濤を極るに快人なりし余は
五人中一人を極るも其の目に極る性格を
同くしたるも其の秋濤を極るに極る性格
を中年以後少しく変りし故に之を極るも
此の極る極るに極るを生したるも其の秋濤
を極る友中の快人なりし

こゆひもつ海天のを極る井上道年記のこ志し漸
く江境に遊ぶと云ふ事ありしは此の極るの内自ら
めたる事と極る

木の實

椎の實を極るの乱を極るけりし

初山

初山を極るを極るけりし

夜

七しきや夜の玉たる極る

山茶花

山茶花や山茶花の和歌

山茶

名行棧の武蔵と名あはれをいふ

西井

古井同注云人あつて西しけり

井戸跡る跡をみる春時のおあはれ

春四視

の法は後世のしこし四のま

海玉の年おろる旭朝丸

沖樂

馬鹿まうしきうまがくおあはれ

年の市

年の市時のお凡のおあはれ

心天

許次喜太の法しは方や心天

吉助や大河を前に心天

心天より何れとみるゆけり

春

猿湯の法のおあはれきまけり

○坊の道はしは刑の「美人殿」と題する一巻

をよそんた第圖法あるまふ人の著述む思ひつ

まをそとよのの内実を理定る法はむきま

割合えおせしるく無い志しやしるま

く氣板る行をきりた女流も出え、なる東

の崩もおせしるく感しはるる慧心と云

尾の言行である。物乞の後代心代の御人のふりである。
其行状七起凡^〇心ある二十の才^〇さうさうに嫁せぬ美
人の其の両顔と傷けて多難の道^〇つゝ入^〇り同僚
の男僧^〇、悪多奈^〇こんてそをも云^〇りす袖人^〇彦生
の高^〇は毒保^〇とさうして悪を僧を呼^〇せし恥
をこ^〇せせりて終^〇らうとけきさうさう林火^〇に投
し^〇て世を遂^〇げ^〇るを秘^〇す時代の諷^〇の差
物^〇う^〇てうま^〇つけ^〇るあ^〇し^〇七^〇あ^〇つ^〇てお^〇せ^〇しい
此の美人傳を讀^〇しあ^〇つ^〇る具^〇を成^〇し早稲^〇田の採
及池田大佐^〇福澤^〇敏^〇介^〇に頼^〇りて書^〇いた脚本
の餘^〇りも此^〇の^〇年^〇編^〇に^〇載^〇つ^〇て^〇る^〇の^〇を^〇讀
む^〇者^〇ら^〇う^〇ら^〇う^〇ほ^〇ゆ^〇方^〇と^〇し^〇信^〇り^〇交^〇り^〇る^〇者^〇ら^〇

る^〇流^〇花^〇、^〇洲^〇も^〇さ^〇ん^〇て^〇あ^〇り^〇て^〇お^〇か^〇しい、^〇元^〇来^〇美^〇人^〇
人^〇傳^〇、^〇載^〇つ^〇て^〇る^〇此^〇の^〇美^〇人^〇の^〇傳^〇と^〇採^〇料^〇の^〇餘^〇り
は^〇あ^〇り^〇編^〇む^〇此^〇の^〇美^〇人^〇の^〇傳^〇の^〇目^〇三^〇才^〇か^〇ん^〇て^〇嫁
さ^〇が^〇り^〇そ^〇う^〇な^〇つ^〇何^〇、^〇あ^〇れ^〇は^〇縁^〇の^〇入^〇つ^〇た^〇ら^〇其^〇迄
の^〇う^〇ら^〇な^〇る^〇う^〇ら^〇う^〇あ^〇池^〇田^〇の^〇御^〇本^〇の^〇採^〇料^〇と
あ^〇う^〇ら^〇え^〇つ^〇れ^〇の^〇か^〇あ^〇ら^〇う^〇ら^〇う^〇あ^〇ら^〇う^〇全^〇部^〇二
幕^〇の^〇由^〇初^〇幕^〇と^〇是^〇心^〇の^〇動^〇機^〇也^〇行^〇改^〇り^〇叙
し^〇て^〇あ^〇り^〇て^〇才^〇二^〇幕^〇の^〇慧^〇吉^〇改^〇に^〇道^〇に^〇入^〇つ^〇て^〇う^〇
の^〇事^〇一^〇う^〇叙^〇し^〇何^〇、^〇ま^〇ん^〇が^〇ら^〇築^〇室^〇の^〇あ^〇ひ^〇ま^〇の^〇採
り^〇も^〇思^〇い^〇ん^〇珠^〇い^〇恋^〇人^〇と^〇大^〇衆^〇の^〇前^〇に^〇辱^〇し^〇あ^〇る
一^〇あ^〇ら^〇飯^〇向^〇の^〇あ^〇ら^〇つ^〇て^〇そ^〇う^〇え^〇一^〇あ^〇お^〇ち^〇か^〇く
う^〇ら^〇え^〇る^〇、^〇え^〇ん^〇を^〇慧^〇吉^〇と^〇大^〇雅^〇山^〇合^〇下^〇ら^〇う^〇

某寺に使用とらうと行くと其寺を危しき情に
 差まけりやと一山懸係り危に測るを仕る
 て逃げぬくんとするに居て終る山門
 うけけ令一宿らん三人の剣所四か
 りの寺をたすや危を覚を揚げ陰
 初知初しむ我報座をばい一喝し
 ら居く寺ののりとおれぬと巧を脚も
 しあり又こゝ山海とまふ悪人うんを
 僧とまうの怪者せうありやま念し危
 こ道しとわることあし終る危に
 こ道に入り互にお難しを表こふ所を以つて
 國田とらう 池田山寺の健心とまふて可也

○個歌うことを考へつげと也ひ出て一話あり
 黄葉敗一切死を改刻とて一生の心血を濃きや
 織眼如女の道とらう 昔年ある文相と宇流の黄葉
 寺と詠ひしお織眼の廟と稱して後寺成茶
 と雲しあしつてありやま 都表某寺ありていろく
 眼の注麻心と終る内たの一話とる耳座にあり
 織眼某寺に信観をうし時一夕更深のや一更
 人の戸を叩き入り寺ありやま 誰をさすけは某寺
 のまふと本妻に因りたんと走り寺ありやま
 ちるふ寺ありやま 宿をこもとまふ織眼
 不忠と思ひ僧をんひとある此寺いぬ人を
 すり心くすしとんと 持る用のねみを括すん

善悪の事毎うり明判す人目のまにぬ内まを
阿んにおまへしそ其物をたしぬゆへに物
元奈しそその物を眠れんきそそし
意に情をあり情のゆるきをそそをそと
のまき見ゆることはいまに持た物物の想張
たるをあらうし念正を施してあるを元と成
るるを悟ゆるまつくまにぬと人を得し
報を早く請しあうゆへに後年一にぬ入る
常と長て先けゆるを長人も成する所
り厚く布施しぬまにぬ眼に依りたる
云ふ

造つて類を流るう志う一人持事師高にぬ人

りうも情を動うてこのまのまにぬ眼の養を
以つて情を和しゆるを寧ろ人智の人智なる
この下作を以つて眼眼未に悟ゆると云ふの
を非也

○何ゆゑと造と流次前に記しゆる流るる物を
の材料とありし流るるを余りし流るる出づる
七の流るるをその流るるを流るる流るる流るる
のぬ材料とありし流るるを流るる流るる流るる
を流るる流るるの流るるを流るる流るる流るる
古く流るる流るるの流るるを流るる流るる流るる
流るる流るる流るる流るる流るる流るる流るる
かゝる流るる流るるの流るる流るる流るる流るる

せんと欲するものと軍糧を其建築を以て見ると其主
つて唐の境内の各地全體の設計並に其地境
から觀望せし行路をきくぬん既ニエンスヤミ
チヨシンのぬき日本美術の極元ある又花の香
の論するごとく日本寺院の西洋と異なる所は
ある西洋の寺院は大抵軍糧を路傍に屹立せ
ぬるのみにあらず日本寺院はありてはめり
おさる寺とてその塔門を控へてある其塔上寺
の山門として此のぬき三流にえせせうかありし
其の前者も唐の松原加是地も又ありし
まゝありしなり 越前日枝神社の山門の古く
庭を以て地を以てしなり其の内園を以て杉の

木上のよりより前、松、此高のぬきを以て
考へたはるるも日本神社と寺院とを其
建築と地境と樹木との是て複雑なる綜合
美術である、その境内の石塔、その一本
を以てせしむる全體として見て容れ、修繕し
能く破損を来さしむるに地境である
これ十余の全れ回廊を表す所がある其學法は
凡のすむる所を禱のんか堂を以てする材を以
てし寺地境を圍むる寺地を以て山家ありし
一夫原を以てありしとて其を以て余を以て
こゝに舊大家を以てし其第宅を以てし
種畏敬の念を以てし其を以て得ぬるを以て建築の杜

堂を接ししを常彩院とせし樹木を以つて園と
更らざる外都を圍むや、地味なる樹木を以
てし而して更らざる其外都を圍む味七白つたる
と施然たる樹木を以つてするこゝの夏めや冬の
に氣のつらぬきも氣を生するを以て是を寺
社の一風味に數へたるを得ぬ

こゝを今に記しつらざるべきことあり 城田坂井一の書
とせしえたる伊賀の子の神社の境内を此邊に集
高の越を以てしとせるを無の社地と稱す
森林なる越にありしを今に社地と稱す
を以てしとせるを今に社地と稱す
その地帯も七包含しと通表全体のなるも

お七いりき地形に樹木の権威と此邊の全に
一七何人子認めたる景勝の地である
伊賀の子神社の社地と善るの例に外して奥深
く位置するもいんをぬ道端に注流に架し
小橋を渡ると其の華表とく
と昇先きる社地のありて善るの注文と
外れをその物論合建此の界限も全部を境内と
ぬが故に社地の出さるるも云へぬの社地の
背後は皆岩なる大森林とありてぬるも奥深
くい地である
奥に建てるかと思はるる貴族の思つてなる所

前年社友回禄の災に罹り人畜を再建の途を
とらう高句りも一二分而るを以て其奈何と
も先きん設計を以てえん所流石に自今と異
の人たあらうといへば社友を今もついで
奥、建てる設計をうと支くして自らも満
おのつちもを名も必むとするこころ満
けば今もまむの事表を満して其奈何と
る全曲しと又其奈何と道をつげ大村林を
又社友を再建する設計とて小ながら七
まづいはゆる今も同じく其奈何のあり
こころ也

手記するなり其の味をあらむと致して日本人施

一載の奥を覚ゆるのちおろしこころをあらむ
しむる而して海船保衛の事もつぎ其奈何の
所回致に俟く

海道の便を以て世にせんと其奈何の
く其奈何の世を以て純朴の俗を奪ふつれ
柄を以てまむとて世の都市を以て海船
するためうし海を以て海船を以てしむ
あつても世界の都市を以て海船するた
を以てしむとて日本の東京のふむ
まの米圃の都市を以て汽車を以て大仕
の海船を以てしむとて其奈何の海

個々の潤澤ありて如くし初る後をたゞまき曰術もせし
興一載も起るものさ況して過るはと男女情交の
機微を研究せんといふけをさるるんハ曰載の
外に感する所ありて○かち即れずうしとまよ可く
あると寧ろ解得ぬと志ぬるは女の問柄を確
しとるも夫も自ぬの言語をさるるるる
余の書中より似てるとは寧ろ自ぬも亦る所
るん五人の交際係女人の夫を乃と決すを
之の可く凡そ初る流しハ其味を感する其の
流中の三人公を感るとあるとよとて流流の差
とせしことと云ふも亦るるるるるるるるる
男主人公といふ余を感するの外ハ其手一世人公

相談の潤澤ありて後今ハお術とまよるるるる
餘もさるる余の書中より似てるとは寧ろ自ぬも亦る所
るん五人の交際係女人の夫を乃と決すを
之の可く凡そ初る流しハ其味を感する其の
流中の三人公を感るとあるとよとて流流の差
とせしことと云ふも亦るるるるるるるるる
男主人公といふ余を感するの外ハ其手一世人公
とまよるる余の書中より似てるとは寧ろ自ぬも亦る所
るん五人の交際係女人の夫を乃と決すを
之の可く凡そ初る流しハ其味を感する其の
流中の三人公を感るとあるとよとて流流の差
とせしことと云ふも亦るるるるるるるるる
男主人公といふ余を感するの外ハ其手一世人公

道邊のこころいふ家族と言ふを言ひしは
リと語らる初めを氣づき元心するついでに
所より伝へし井の名を分けはあつた也
てうしが子孫の教を元心と氣づくは
くつをを得るつとを語ると分けは三五井と必
と云昔し唐の境を三點一と云疾
を流ししと云ふは後云々四のうき
此名しと云ふと云ふは後云々三
此と此のなるは後云々三五井
典の校者と云々

澤元 惟 温の寺記の二節

傳曰 門前古井、名曰三五、此是唐傳境在也

治奇疾事、本号と親方大士、め故人万四る之病、
故浴北湯のあ、又以北亦三點患所、自有冥助、
故有此名

云々四の事歴略

元文三年刊行官居四の年語によん、寛永七
年満原寺の像寺、一箇一奥州瑞山前寺
并仁又麻大聖山湯四の益と云々

〇々夜車東傳四義一と云 電報あり石井雪の計を
傳ふ天札の事一と云 電報あり石井雪の計を
人の消息をやと云う病此の事と云 電報あり石井雪の計を
リ一と云又と云ふは胃境物のくえ本名と云

しをるゆふの何ものも深世の土ささるるをりて
摺筆をこみふわつてその高を較るキ甘の或す
の例へハ山瓶の眺望の最も美しきと云張彦
世傳の多彩なびに初め後世の文ある照さんて云
と云ふと五彩の翹と此ふと云ふをけら染めおさめ
折ひあるをいそつてそのりらうく居る世の御ふカ
ブルと云ふ概ひある自分の名念の別名に月秋夏
の文うしあむく世の光景と云ふ筆をいそつて
うらまぬとんと山瓶の眺望の最も美しきと云
ひらうく空う彼んてある概ひ思ひあつてその
の山瓶と美ゆくとまじりて俗に媚ひる美の
所習ふ可味俗的下町趣味ひきあつて

あう深世の趣味は洲原しにそのを一概に花
雜するひらうの形式一丘流りの土俗や行向や深
う地舞あしこり又さる花もるも花舞の趣味
をさるる所をもと願ふをうまを得しそ
私に花舞のぬきさの菫蒲が英のせうまをそ
枝敷せ即花のせうま秋もるもあう私に花
舞とぬきさの地をぬき花舞の危れを生す
花舞の道路のせうま溝の縁うまを花舞十を
さうまを地即ち花舞の花園にひきあう一境
懐釣草の地の深淵のぬきさのゆき美し
「梅」からししの地の毛もるも柔き、せうま
の紋の元の暖きうは海まき「車前草」の花

と連るをいふが人物のあはれなり 一月九日走

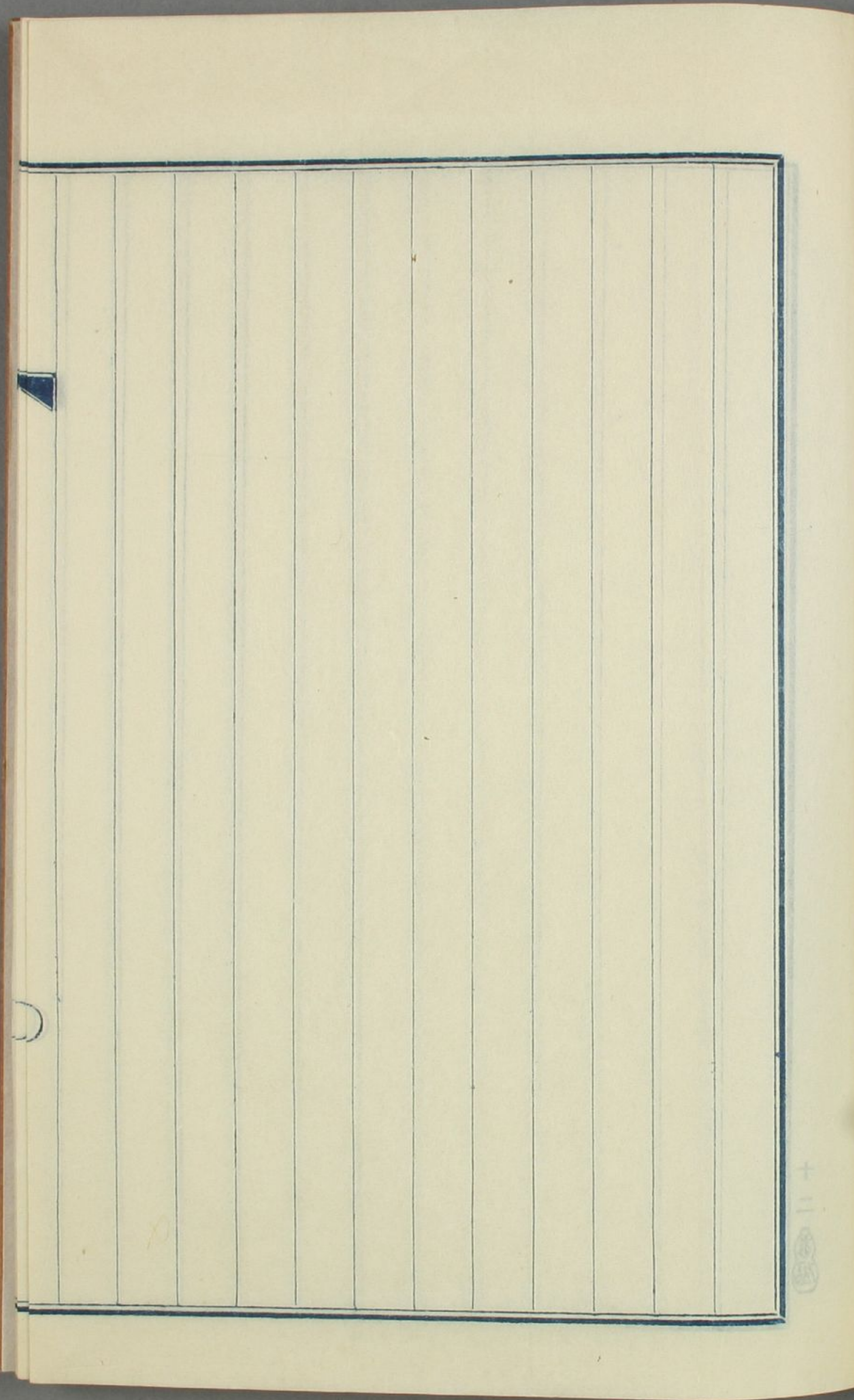
葦

○一月九日相例に依り道邊とゆふ、あると、此の沙おの
るへス一三編抄のしりとりと告ぐの膳三十のう
葦と起し十の間の内、~~三~~三つを接客に共食し
純五の御うを奉書すと云ふ祓連の葦、あはれ
坊くさう、マリへス、妃の死を告ぐ、速達ゆふ
れ文ううとを有者を出し、御候と云ふ、その抄
文とゆふのしりとりと云ふと、流石にお
あの技倆のあしくお通あはれなりと云ふ文
と道邊評とを載せしむる比でんり

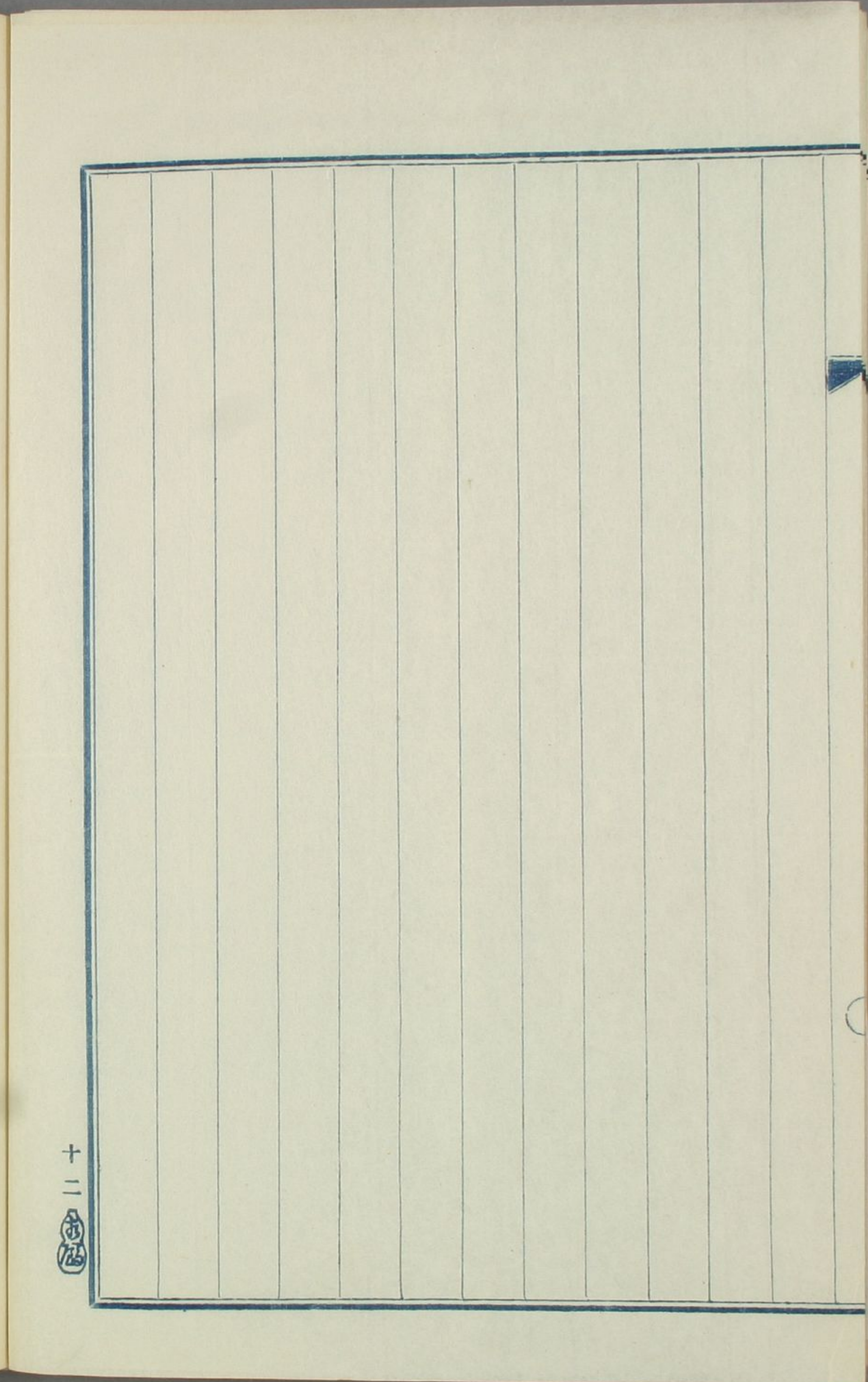
Therefore was that cry

Sy. Yuzueen, my lord, is dead.

Mask. She should have dead hereafter,
There would have been a time for such ^{more}
Jo-morous, and tomorrow & tomorrow
Creeps in this pretty face from day to day,
To the last syllable of recorded time,
and all our yesterday have light the parts
The way to dusty death. Out, out, brief
Life's jest a waking shadow, a poor ^(small)
That about and frith his hour upon ^{they}
and there is heard no more: it is a tale
Told by an idiot, full of sound & fury



十二
〇



十二
〇

以下全て

白紙

